

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―
時慶記のキリシタン(5) 西洞院家の女性たち

島野達雄

時慶の老母をはじめとする西洞院家の女性たちは、秀吉の生母や正室と交際していた。とくに時慶の内儀は、正室・北政所やその侍女の孝蔵主と親密な交際をおこなっていた。北政所が孝蔵主をお供にして時慶邸に來臨したこともある。逆に内儀が北政所の居所に泊めてもらったこともある。

藤田恒春は、時慶の内儀と孝蔵主が姉妹であったと推定している^[1]。

本稿では、まず、「寿溪」の法名をもつ時慶の老母が高名なキリシタンであったと考えられる根拠を示す。次に、時慶の内儀と孝蔵主が実の姉妹であったことを裏付ける記事を示す。

最後に、フロイスと松田毅一の所論を整理し、前稿で述べた「マグダレーナ^[2]」と「客人」のどちらも一人ではない、と考えられることから、北政所と特に親しかった時慶の内儀こそが「マグダレーナという教名をもつ北政所の客人」ではないか、と推論する。

1. 老母と大政所・北政所

時慶一家と、秀吉の生母・大政所や正室・北政所（高台院）との接点を示す記事は、既刊『時慶記』の劈頭（へきとう）天正 15 年（1587）から、近刊の元和 4 年（1618）まで毎月のようにあらわれる。

天正 15 年 9 月、秀吉・大政所・北政所は、大坂から上洛し、聚楽第へ移徙（わたまし・引越）をおこなった。公家衆は列をなして歓迎の礼を尽くした。

今日北政所殿御上洛、直ニ御移徙也、輿数二百丁程在之由也（天正 15.9.13）

北政所へ小袖拝領ノ御礼、各列シテ民部卿法印[前田玄以^[3]]迄行テ申入也（天正 15.9.18）
時慶の老母と大政所とは親密な関係であったようである。

殿下 [秀吉] 宇治へ茶御見物ト云々、老母女房衆ヲ始而里帰ノ礼ニ孝蔵主へ召連被出候
[割注：乳暇ヲ遣候]、政所殿へ次ニ果子ノ箱一進上候（天正 19.3.15）

この記事は「老母は、（時慶の内儀を含む）女房衆を里帰りの挨拶として孝蔵主のもとへ連れて行った。政所にはくだものを進上した」と解するのであろうか。3 月 28 日には、老母は再び政所を訪問。4 月 9 日には、芍薬一本を進上している。（肝煎は、きもいり。配慮）

老母へ食進候、礼ニ参候、政所殿へ御礼ニ被参候、果子箱等事肝煎候（天正 19.3.28）
政所殿へ従老母芍薬一本進上候（天正 19.4.9）

天正 19 年（1591）7 月 20 日条には、「聚楽へ賀茂殿迄、政所殿御不例ヲ尋申ニ、老母ヨリ参候」とある。秀吉の生母・大政所はこの年 8 月 29 日に死亡している。老母がたずねた以上の「政所殿」は大政所を指すのであろう。

一方、北政所へも老母は孫の時康（のちの時直）を連れて挨拶に行き、白綿を貰っている。

老母時康召連北政所へ御礼に被出候処、御盃兩人に被下、白綿十把老母に被下候、於曲庵拵（こしらえる）也（天正 15.9.20）

文禄 2 年（1593）4 月、老母は時慶から餞別をもらって大坂へ向かった。

老母七条迄被越候、明日大坂へ可有下向ノ由候、三十疋餞ニ進之候、北政所殿へ枸杞（くこ）ヲ身上、折箱一進上候（文禄 2.4.17）

北政所殿ヨリ老母へ小袖給、則某へ給ヲ只今返進候（文禄 2.5.2）

このような記事から、老母は大政所および北政所と面識があり、親しい関係にあった、と推定できる。

次に、時慶の老母（法名寿溪。以下寿溪とよぶ）が信者たちに敬愛される有名なキリシタンであったと考えられる理由を述べよう。

2. 寿溪の謎

時慶の亡母・寿溪は、慶長 5 年（1600）8 月 26 日条に「今日は依母の忌日不参の御理申入」、慶長 7 年（1602）4 月 8 日条に「花を仏に供、又寿溪七回忌の為志」、同年 8 月 17 日条にも「肥後国より便宜あり、才二郎来、無事由申候、為志に良子十匁被上候、寿溪の七回忌の香典也」とあり、慶長元年（1596）8 月 26 日に亡くなっている^[4]ことがわかる。

生前の寿溪に対して、時慶は新在家の曲庵^[5]に対すると同じように丁寧な敬意を示している。ほぼ毎日、見廻（見舞）に訪れ、寿溪の「節」には一家をあげて出向いている^[6]。

寿溪が亡くなり十年を経ても、時慶は回向を欠かさなかった。慶長 10 年（1605）3 月 12 日条に、「昨日提婆品（だいはぼん。妙法蓮華経の一品）誦、毎日亡母へ廻向」とある。

時慶には絵心があったとみられる。天正 15 年（1587）6 月 27 日条に「終日匂袋の絵を画す」とある。下の亡母の絵像は時慶自身が描いたのであろう^[7]。

亡母の影鼠損候^[8]、表具を改に遣候、以唐紙裏打も誂之（慶長 19.4.29）

寿溪の御影表具出来并裏打等（慶長 19.5.4）

時あたかも幕府の全国禁教令を受けた大久保忠隣の京都キリシタン弾圧に対して、「ダイウス門徒未だ倒れず」と時慶が記し、7 月には角倉了以が死亡、10 月には大坂冬の陣が始まった慶長 19 年（1614）のことである。

この御影事件の前年、亡母・寿溪の周辺には不思議な事件がおこっている。

十念寺詣、法談アリ、蠟燭十五丁遣候、少納言同心候、別時ハ少納言ヨリ申付候、方丈ニテ焼香候、寿溪ノ石塔失却、不審々々（慶長 18.5.25）

これは、「十念寺の法談・焼香・別時（午後の食事）に少納言（長男時直、はじめ時康）とともに参加したところ、寿溪の石塔がなくなっていた。不審きわまりない」というもの。

牌石塔寿溪大姉ノ失却ニ付而、今日雖申付、日不善故不立、寺へ案内申候、灯籠不善故ニ改候テ申付候（慶長 18.7.10）

殉教したキリシタンの遺品や衣服、ときには墓を掘り起こして遺骸そのものまで、信徒が奪った例がある^[9]。寿溪の石塔は、キリシタンによって奪われたのではないだろうか。

逆に、仏教徒がキリスト教徒の墓を壊した例もある。高槻にあったアルメイダ修道士の墓を「異教徒たち」が破壊し、遺骨をまき散らしたという^[10]。

いずれにせよ、石塔失却事件は、寿溪にそうとうな知名度があったことを想像させる。時慶の亡母・寿溪は、高名なキリスト教徒だったのでなかろうか。

元和4年（1618）8月26日、おおやけには「般舟院にて後陽成院御一周忌」がおこなわれた日、既刊『時慶記』のなかで最後の寿溪の記事があらわれる。

私ノ志ハ寿溪忌日也（元和4.8.26）

没後22年を経ても、時慶の胸には寿溪が生きていたのである。

3. 当今無双の才女・孝蔵主

坪内逍遙が戯曲「桐一葉」で、孝蔵主になぞらえた昌栄尼を「当今無双の才女」と表現したように、孝蔵主が北政所に近侍して豊臣家奥向きの奏者（そうじゃ、取次ぎ役）を勤め、権勢並ぶものなき尼僧であったことに誰しも異論はないであろう。

実際、時慶は孝蔵主を通じて自領の紫竹（地名）の人足（にんそく）差出しを免除する書類を得ており、秀吉に菊花を進上した折には、「孝蔵主御取次也」と明記している。

昨日従孝蔵主〔川添氏女〕紫竹宥免之折昏、普請奉行方へ被遣候、今日南方へ差遣候（天正19.1.28）

紫竹人足宥免候、孝蔵主へ奉行衆ヨリ文ノ返在也（天正19.1.30）

殿下〔豊臣秀吉〕へ菊花色々進上候、孝蔵主御取次也（天正19.5.20）

孝蔵主は、蒲生定秀（キリシタン大名・蒲生氏郷の祖父）に仕えた川副（川添）勝重の四男二女の長女として生まれた^[11]。『時慶記』では、孝蔵主を一貫して〔川添氏女〕と注記している。出家して尼僧となり、孝蔵主と称した^[12]。

孝蔵主は、徳川政権の確立後は、北政所の17,000石と比べると微禄ではあるが、秀忠から知行200石を受けている。

時慶一家と孝蔵主の関係は深い。文禄2年（1593）10月4日には孝蔵主は時慶邸に逗留し、曲庵をはじめ新在家衆の歓迎を受けた。

孝蔵主逗留、桶湯申付候、方々礼者多、…曲庵・同内儀・端坊〔明念〕・同内儀・明勝、一乗院〔尊勢〕殿、近衛殿無土産、九兵へ（九兵衛）内儀・江村〔専斎〕内儀・速水友益様ノ衆^[13]、其外方々ヨリ使人多シ、…晩ニ孝蔵主ハ帰り也（文禄2.10.4）

文禄慶長の時代、孝蔵主はおそらく日本でもっとも多忙な日々をおくった女性であろう。北政所と離れ、単独で秀吉に従って肥前名護屋や尾張に赴き、聚楽第が完成すると毎月のように京都・大坂を往復。関ヶ原の合戦の前には大津・大和・江戸へ下向、大坂の陣の後には、家康との折衝のために駿府に行き、その後は秀忠に仕えて江戸に住んでいる。

東奔西走の合間をぬって、孝蔵主は時慶邸に泊まっている。

孝蔵主今朝迄滞留、只今城へ出仕ト（慶長5.4.16）

日出度事ニ息女子共呼、…孝蔵主家中不残呼、桶樽ニ・ハム廿本、孝〔孝蔵主〕ハ右府

〔徳川家康〕ニ伺候トテ夜ニ入テ来入、則被泊（慶長 8.7.8=1603.8.14 木）

なお、前稿でシンサ・ガヨに比定した長野殿も上の目出度事にやって来て、時慶邸に宿泊している。長野殿は慶長 15 年（1610）10 月 28 日にも時慶邸に泊まり、慶長 14 年（1609）7 月 21 日には、「孝蔵主は長野殿に被泊由候」と孝蔵主が長野殿のところに泊まっている。

長野殿が秀吉の警固の侍であったシンサ・ガヨであれば、孝蔵主と親しくしていても不思議ではない。

孝蔵主が時慶邸に宿泊したのは、慶長 5 年・8 年は前記の一泊だけ。慶長 9 年（1604）は二泊^[14]だが、慶長 14 年は十五泊^[15]、慶長 15 年は十二泊^[16]におよぶ。そのほとんどが深夜に時慶邸を訪れ、早朝に帰るという多忙振りである。なお、この他の年の宿泊はない。

4. 時慶の内儀の謎

時慶の内儀（妻）は、どのような経緯で西洞院家の「女房衆」となったのか、よくわからない。名前も不詳である。

『時慶記』第 1 卷（天正 15 年・天正 19 年・文禄 2 年）では、一貫して「女房衆」と表記し、第 2 卷の巻頭、慶長 5 年（1600）1 月 7 日の「石屋ニテ孝蔵主ノ祈祷如例、内儀同心シテ行（川添家のある石屋でいつものように孝蔵主が祈祷した。内儀も同行した）」で初めて「内儀」と表記している。女房衆から内儀に格上げ（？）された経緯もわからない。

面白いことに、この頃から時慶は「女房衆」や「内儀」に、「被出候（出られ候）」「被参候（参られ候）」などと孝蔵主と同様に敬語を使っている。

孝蔵主の実父・川添彦右衛門は、天正 19 年（1591）2 月 20 日に死亡した。前日には、内儀をふくむであろう女房衆が、孝蔵主の里つまり川添彦右衛門（彦衛門）の見舞に行っている。ここでの女房衆には、「被出候（いでられ候）」と敬語を使っている。

女房衆ハ孝蔵主ノ里へ被出候、病人見廻ニ行也（天正 19.2.19）

川添彦衛門昨夜遠行候、今朝弔ニ人ヲ遣候（天正 19.2.20）

一年後の文禄 2 年（1593）2 月、内儀をふくむ女房衆は「養父」の忌日を営んでいる。

女房衆ハ養父〔川添彦右衛門〕ノ志〔忌〕アリ（文禄 2.2.18）

すなわち川添彦右衛門は時慶の「養父」である。この記事から内儀は、川添彦右衛門の実の娘であったか、または川添家の養女となって、女房衆の一員となったと判断できる。

孝蔵主は川添彦右衛門の長女であるので、以上から、孝蔵主と時慶の内儀は、川添彦右衛門の長女と次女、または実の娘と養女という「姉妹」であったと考えられる。かりに養女であったとしても、おそらく二人は幼い日々をともに過ごしたのであろう。かたちだけの姉妹を越える二人の親密な関係は、下の記事からうかがえる。

女房衆ハ禁中御能見物ニ孝蔵主ノ席へ被呼候（文禄 2.10.11）

孝蔵主ノ衆へ内儀ヨリ、メイメイニ脚布等ノ物ヲ遣候、孝蔵主ハ昨日ヨリ伏見へ被越、未帰京、直ニ大坂へ被越ト（慶長 5.7.13）

孝蔵主と時慶の内儀が実の姉妹と考えられる強い根拠として、次の記事をあげる。

内儀ハ泊懸ニ孝蔵主へ被出，明日駿府下向也，就其談合之儀共在之，竭心緒候（慶長 14.9.26）

「内儀は、泊懸（とまりがけ）で、明日駿府へ下向する孝蔵主を訪ねた。その晩、心緒（しんちよ）つまり思いのたけを竭（つ）くして二人は語り合った」。

秀吉の命を受け、北政所のもとを離れ、肥前名護屋の陣中に過ごしたこともある孝蔵主。明日は、次代の権力者、徳川家康の居城駿府へと旅立つ。孝蔵主と内儀には語りつくせぬものがあつたのであろう。

この慶長 14 年（1609）の 2 月 26 日には「於孝蔵主銀子借用」と時慶は、孝蔵主から銀子を借りている。時慶にとって孝蔵主は家計の相談ができる相手であつた。

同年 5 月 24 日には、「夜半に孝蔵主来儀にて被泊候，予は不知，明日に聞」の記事がある。孝蔵主が夜半にやって来て泊まったことを一家の主（あるじ）である時慶は気づかなかつた、というのである。この記事も、孝蔵主と内儀が実の姉妹であることを裏付けている。

時慶が内儀に敬語を使っているのは、内儀が「権勢並ぶものなき」「当今無双の才女」とうたわれた孝蔵主の実の妹であつたからか、あるいは、新在家の曲庵や老母・寿溪と肩をならべるほどの尊敬にあたいする敬虔な信仰者であつたからであろう。

なお、二人の母親は、天正 19 年（1591）8 月 22 日条の「女房衆清水寺へ詣候，孝蔵主ノ母儀同心也」に、「孝蔵主の母」として登場している。

孝蔵主の母は文禄 3 年（1594）に死亡している。慶長 15 年 1 月 13 日条に「早朝東福寺へ越，南昌院にて孝蔵主母儀の十七回忌有作善」とある。

この母親については、上の清水寺参詣と東福寺南昌院の記事しかないようである。

5. 内儀と北政所

時慶の内儀は、秀吉の正室・北政所（高台院）と特別な接点があつたと想像できる。

前稿では、文禄 2 年（1593）5 月 10 日、北政所から客人の書状を添えて、時慶の女房衆に米五石が贈られたことを紹介した。

慶長 7 年（1602）正月には、年頭の挨拶に出かけた内儀に、北政所から米五石が贈られている。（トチは孝蔵主の執事役の老女。刀自）

内儀ニハ北政所へ御礼ニ被出，杉原十帖・水引十把，但孝蔵主ノ被取替帯二筋ヲ上ニ置ト，孝〔孝蔵主〕へ予ヨリ五十疋，トチへ二十疋，内儀ヨリ樽・鯛五・昆布，トチへ三十疋，千・シヤナへ吉野紙，小性共ニハ紅皿遣ト，金千世ニ小袖，内儀へ米五石給（慶長 7.1.11）

昨日北政所ヨリ給五石ノ切手ニテ米五石□□肥後守ニテ請取候（慶長 7.1.12）

慶長 9 年（1604）3 月には、北政所（高台院）が孝蔵主をお供に時慶邸に光臨した。この日は、偶然であらうが、キリシタンの天文学者・賀茂在昌も時慶邸を訪問している。

孝蔵主来儀，〔賀茂〕在昌モ暇乞ニ来，…孝蔵主ハ被帰，又タニ高台院殿御供ニテ此庭へ光儀也，内儀ニハ御跡ヨリ送ニ被参候，台物・酒ヲ拝領候（慶長 9.3.7）

翌年 6 月、北政所が東山康徳寺に移居した際には、内儀がお供に加わった。

早辰内儀ハ東山康徳寺へ移徙、北政所殿御越御供ニ被出、…日没ニ帰京候(慶長 10.6.27)

この年 12 月、北政所へ年末の挨拶に赴いた内儀が、対語深夜に及び、そのまま北政所のもとに宿泊したことは、とりわけ内儀と北政所との深い関係をあらわしている。

北政所へ内儀ハ歳末御礼ニ被参、及晩故ニ被泊、大錫ニ酒・重箱持セ進上候、孝蔵主へ重箱・双瓶被持(慶長 10.12.22)

北政所が病気になった元和 4 年(1618)には、内儀と時慶がしきりに見舞におとずれ、粽 50 把(5.28 時慶が進上)・瓜 30 果(6.17 以下すべて内儀が進上)・饅頭 100 個(7.6)・松茸 30 本(9.9)・蜜柑 200 個(12.4)と大量の進物をおこなっている。

以上の記事から、内儀と北政所には、特に親密な関係があったと想像できる。『時慶記』に登場する女性のなかで、内儀は北政所と一番親しい関係にあった、と言ってもよいだろう。

6. フロイスの記述

フロイス「日本史」は述べている^[17]。「羽柴(秀吉)は大坂城に夥しい数の婦女子をかかえていた。…宮殿にいるそれら貴婦人や女官の中には、五、六名のキリシタンが混じっており、そうした既婚夫人の一人にマグダレーナと称するかなり年配の人がいた。彼女は羽柴夫人(北政所)の侍女を務め、彼女(北政所)とはきわめて親密な間柄にあった。…彼女は宮殿内で一人の娘とともにいたが、羽柴(秀吉)は金銀の宝、その他一切の財宝をマグダレーナの娘の手を経て受理したり分配することにしていた」。

秀吉の財宝を管理していた「マグダレーナの娘」には、孝蔵主が真っ先に思い浮かぶ。

かりにマグダレーナの娘が孝蔵主であったとすると、母親のマグダレーナは、孝蔵主と時慶の内儀の姉妹にとって義母にあたる時慶の亡母・寿溪が該当するだろう。孝蔵主と時慶の内儀の姉妹は、寿溪から見れば、「義理の娘」と言えるからである。

なお、桑田忠親は「大政所の奏者は「こほ」だった」と述べている^[18]。本稿で述べたように寿溪は大政所と交際があった。孝蔵主という呼び方(侍女としての雅名)は、「こほ」との関係がうかがわせるものである。

むろん、先述した「孝蔵主の母」をマグダレーナに比定することも可能であるが、孝蔵主の母は、文禄 3 年(1594)に亡くなり、東福寺に葬られたことしか、『時慶記』からは読み取れない。孝蔵主の父である川添彦右衛門についても、材料が乏しいと言わざるをえない。

7. 松田毅一の所論

フロイスの著述に対して、松田毅一は、長所と欠点の二つの性格がある、と指摘する。

「フロイス文書は詳細、且つ一般的に言つて的確であり、日本史料を補うところ多く、極めて価値高いものである。その間に見られる相当多くの誤謬とか矛盾に関しては、書翰は、年報や「日本史」に比して誤りが少く、原文に遡れば、誤謬や矛盾と思われるものも殆んどは筆写に際しての誤りか誤解であると認められる」。

ただし、「年報は、厳密には第一次史料とは言えないもので、フロイスは編輯者に過ぎず、上長により修正されても居り、「日本史」は編纂物であって、之亦（これまた）第一次史料とは言えない」と、フロイスの著述をきわめて厳格に峻別している^[19]。

前稿では、松田毅一が、1583年（天正11年）の大坂城に「マグダレーナ客人」と呼ばれるキリシタンの婦人がおり、夫は、天正16年（1588）のイエズス会総長宛書状に署名したシンサ・ガヨである、と述べていることを示した。

フロイス「日本史」の出版後、松田毅一は『南蛮太閤記』で次のように記している。

「この「きゃくじん」というのは、どういう漢字を書くか私にはわかりませんが、山中山城守長俊^[20]という秀吉の右筆が出した手紙のあて名にも、やはり、「おきゃくじんさま」と平仮名でありますからまさにこの人です。この人は北政所と一番親しい関係にあったようです」^[21]。

天正11年（1583）の「客人」を時慶の亡母・寿溪に比定すると、その夫、シンサ・ガヨは時慶の実父・安居院覚澄が該当する。だが、安居院覚澄の生没年や経歴は不明である。

さらに、天正11年の「客人」を時慶の内儀に比定することもできる。このばあい、夫のシンサ・ガヨは『時慶記』の記主・西洞院時慶その人になる。シンサ・ガヨは秀吉に近侍した警固の侍であるので、言うまでもなく時慶がシンサ・ガヨではありえない。

なお、当時の慣例として時慶には数人の側室（女房衆）がおり、元和4年（1618）時慶67歳のとき、官位についていた直系男子では、時直（時康）35歳、時興（金千世・金丸・平松時興・平松時庸^[22]）20歳^[23]、時良9歳がいる。

時慶の女子には、老母としばしば行動を共にした「御福」、長野殿としばしば行動を共にし、算用が得意な「孝与」、東福寺喝食の「長」、高台寺喝食の「捨」、津軽家に嫁いだ「津軽糸」、それとは別人の「糸」、養女の「駒」「辰^[24]」「虎（寅）」「見哲」「万」、内裏に入り後陽成天皇の皇子高雲院と皇女永宗女王を産んだ「時子」、その妹の石井局と呼ばれた「行子」、内儀の名代として何度か孝蔵主をたずねた^[25]「今」などがいる。

これらの「娘たち」にも「マグダレーナの娘」や「客人」と判断する材料は見当たらない。

なお、孝蔵主は生涯独身を貫いており、夫がいたとする史料は存在しない。

8. マグダレーナ客人の謎

前稿で述べたように、「客人」は一人ではなく^[26]、「マグダレーナ」という教名の女性も一人ではないであろう。つまり「マグダレーナ客人」は一人ではない、と仮定できる。

この仮定のもとでは、「娘が秀吉の財宝を管理していた、教名マグダレーナの老婦人」を時慶の亡母・寿溪とし、天正11年（1583）の「北政所と一番親しい関係にあった客人」を時慶の内儀とし、「シンサ・ガヨを夫にもつ教名マグダレーナの婦人」を前稿のように長野殿の妻とすることが可能になる。

『時慶記』慶長14年（1609）1月13日条の「高台院殿の客人へ折一・雪魚五・指樽遣候」、慶長15年（1610）5月25日条の「高台院殿従大坂御上洛と、内儀は見廻被申候、香

藁散進上、客人・孝蔵主へも」から、天正 11 年から 30 年近い歳月を経た慶長の終わり頃にも「北政所（高台院）の客人」が存在していた^[27]ことがわかる。

北政所と特に親しかった時慶の内儀は、女房衆の一員となるまでは「マグダレーナという教名をもつ北政所の客人」であったのではないだろうか。フロイスはもちろん、松田毅一さえも、「マグダレーナ客人」は一人しかいない、と誤解していたのではないだろうか。

-
- [1] 藤井謙治編『織豊期主要人物居所集成・第 2 版』2016 の 460p. 姉妹と考える理由は示していない。
- [2] マグダレーナはマダレーナ、マグダレナとも表記されている。同一人物であるので、本稿ではマグダレーナとのみ表記する。
- [3] 前田玄以は、ヴァリニャーノがもたらしたインド副総督の書状に対する秀吉の返書を、イエズス会の意向に沿うように書きかえたとき協力した、とフロイス『日本史』が伝えている。時慶は前田玄以の屋敷の譲渡（天正 15.5.10）や官位の入眼（天正 15.11.22）に尽力している。
- [4] 文禄 2 年 7 月 14 日の生霊祭に「老母を初而焼香候」とあり、「老母をはじめて焼香候」と読めば、老母つまり時慶の実母は文禄 2 年頃に亡くなったことになるが、この記事は、生霊祭にあたって「老母をはじめとして（時慶の家族たちが）焼香候」と読むのであろう。この記事の翌日以降も老母は健在である。
- [5] 医学書『全九集』を書写した新在家の曲庵が日本人修道士ビセンテ洞院と考えられることは、「時慶記のキリシタン(3)曲庵と呼ばれた人々」に述べた。
- [6] 天正 15 年 2 月 12 日条に「老母所へ節ありて一家皆行也、終日也」とある。
- [7] 寿溪と同じ十念寺に葬られた絵師の海北友松が寿溪の絵を描いた可能性もある。なお、この絵像の二つの記事から、亡母の法名が寿溪であることがわかる。
- [8] 慶長 10 年 9 月 24 日条に「猫虎毛孝与より被返候」、同年の「雑略記」10 月 20 日条に「御所〔後陽成天皇〕より猫御拝領事」とあることから、内裏や公家衆、庶民の間でネズミ捕りの猫の貸し借りがおこなわれていたことがわかる。
- [9] 日本二十六聖人の遺骸は信徒によって分けられ、世界各地に送られた。殉教の後、信徒が遺骸を掘り起こしたという。カトリック教会では、殉教者の遺品や遺骸を「聖遺物」として尊崇している。
- [10] 『完訳フロイス日本史 5』83p
- [11] 『江戸期おんな考・第十二号』の藤田恒春「豊臣・徳川に仕えた一女性—北政所侍女孝蔵主について」。
- [12] 桑田忠親『桃山時代の女性』142p.
- [13] 『言経卿記』天正 7 年 6 月 28 日条に、安土宗論に日蓮宗が敗れた結果、洛中騒動斜めならず、「新サイ家衆速水・江村・大藤・黒川、其外大勢来」と新在家衆が言経邸に避難したとある。速水友益、江村専齋は新在家の曲庵（キリスト教会）に集うキリシタンであろう。
- [14] 慶長 9.4.10, 10.29 の 2 泊。
- [15] 慶長 14.3.17, 4.12, 4.13, 4.22, 4.23, 5.24, 6.4, 7.10, 8.7, 8.8, 9.2, 9.5, 10.29, 12.6, 12.11 の 15 泊。
- [16] 慶長 15.2.8, 閏 2.22, 3.17, 4.22, 5.2, 6.2, 7.6, 8.18, 9.7, 9.14, 10.8, 10.9 の 12 泊。
- [17] 中公文庫『完訳フロイス日本史 4』松田毅一・川崎桃太訳。37p.
- [18] 桑田忠親『桃山時代の女性』145-146p.
- [19] 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』520p.
- [20] 慶長 7 年 12 月 6 日条に「照高院〔道澄〕見廻申、山中山城守〔長俊〕同参にて物語永々敷して、夜更橋辺迄送を被付候」とあり、時慶と山中長俊は面識があった。孝蔵主と山中長俊は、ともに文禄の役に際して肥前名護屋の陣中であつたので、面識があつたと思われる。山中長俊が秀吉の右筆となつたのは天正 13 年とされる。
- [21] 松田毅一『南蛮太閤記』朝日文庫 1991. 244p.
- [22] 京大図書館平松文庫には、平松家に残された西洞院時慶の 100 冊余の蔵書がある。時慶が相当な知識人であつたことがわかる。
- [23] 慶長 8 年 11 月に袴着を迎えた五歳の金千世（金丸、のちの時興・時庸）は、幼い身ながら時慶の名代をつとめ、北政所や孝蔵主に褒められている。
- [24] 慶長 15 年 12 月 26 日条に「高台院殿上臈、予猶子辰の方」とある。
- [25] 慶長 10 年 6 月 27 日、同年 10 月 20 日など。
- [26] 慶長 14 年 6 月 5 日条にも「孝蔵主被帰候、御客人衆在之と」と客人が複数いたことが示されている。
- [27] 「北政所の」と限定しない「客人」の記事は、最近刊『時慶記』第 6 巻の慶長 19.7.6, 同 7.11, 同 7.12, 同 10.14, 元和 4.7.17, 同 7.19, 同 9.9 にもある。